

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



福山市駅家町に立つ服部分教会

明治34年設立以来の長く深い歴史を感じる

立教180年
11月号

秋季大祭講話

信じ、凭れ切って通り

「大恩」に報じる道

世話人 島村廣義先生



お話し下さる島村先生

去る10月21日、大教会秋季大祭にご参拜くださった世話人・島村廣義先生は、人材育成の句としての本年の歩みを振り返られ、かんろだいの節にも触れながら、今時句の、教会長としての、また一信仰者としての指針を示された。

以下にその要旨を掲載する。

▼人材育成の句

昨年、教祖130年祭をつとめ終え、その後の歩みを真柱様が打ち出されました。今年は、その思召に従って、年祭後の活動を進めてきました。

真柱様は、年祭後の活動は「人材の育成」、道の将来を担う人材を育成することは、私たちの大切な御用だと諭されました。

特に、人材と申しても、陽気ぐらし世界建設のために立ち働くよふぼくを育てるということです。

よふぼくを育て増やすことに、これから力を入れていきたいと思召されました。

人を育てるということは、一朝一夕には出来ません。年限も手間も掛かることですが、130年祭も終わり、改めて、しっかりと足許を見つめ直して、長い目で道の将来を担う人材を育てる、増やすことに、腰を据えて取り掛かりたいと仰います。

▼3つの角目

この真柱様の思召を体して、表統領は初心表明され、先ず第一に、ご恩報じの意識をしっかりと高め、それを実践することを打ち出されました。

さらに、教会長を中心におたすけ活動を拡げていく、おたすけの実を求め、実績を着実に積み上げていくことを促されました。

そして、さらに、この活動を通して人材の育成、丹誠の充実を図りたいと話されました。

この大きな3つの角目の活動を、具体的な諸策をもって進めることになりました。

具体的な方針がいろいろと打ち出されていますが、一番大きな角目は、後継者講習会・教会長子弟育成の練成会でしよう。

▼後継者講習会

後継者講習会は、道の将来を担って立つ後継者の育成の上に親心を掛けられて、20歳から40歳までのよふぼくを対象に、今年の8月から来年の3月にかけて25回に分けておちばで実施されています。

10年に1遍、その句が来たから、年祭の年が来たから開催されたのではなく、本当に、初席以上の御用を実動できる——に、いがかげが出来、おたすけが出来、おさづけを取り次げる——よふぼくを育てていく講習会です。

前回、教祖120年祭のときも実施されていいますが、今回は第8次が始まり、いよいよ熱が入ってきていますし、受講された方々は、本当に喜び勇んで土地処へ帰られていますので、前回以上に大勢、受講され、おちばの理を受けていただきたいと思います。

笠岡大教会では、10年前の講習会では208名の方々が受講されました。今回の申込数は、残念ながら10年前を下回り、161名ですが、それ以上のご守護を頂いてもらいたい。

「まだ、自分は講習なんか」という方も遅くはありません。今からでも、心に掛かる人があれば、誘い合わせて、一人でも多くの人に受講いただき、よふぼくとしての使命に奮い立ち、たすけ一条の御用の上に立ち働いていただけるよう、皆で、日々、勇んで頑張りますよう。

▼教会長子弟育成の練成会

教会長子弟育成の練成会ということについては、具体的には、教会長子弟育成プロジェクトを立ち上げ、教会長の認識を改めるとともに、子どもの意志に任せずに、道を通らせるという意識をもって、日々の暮らしの中で、強

い指導力を発揮してもらいたいとの仰せです。

それぞれの直属が、3ヶ年の仕切りをもって、教会長子弟の育成の上に丹誠し、研修会を持つよう仰っています。

▼育成とは、自らが育つ姿を映すこと

人材育成というと、何かしら、自分が人様に教え諭すように思いがちですが、そうではなく、一信仰者としての自らの道の通り方を身をもって修理・確立し、それを映していくことに外なりません。

真柱様は、日常生活における道の信仰者としての在り方を、改めて確認する上で、かじもの・かりもの、理、八つのほごりに焦点を当てて、一信仰者としての通り方を、分りやすく諭されました。

かりもの体に頂戴する親神様の自由のご守護、このありがたさをしっかりと身に感ずること。生きていく喜び・感謝の発露であるその行動を、ひのきいんという形で具体的に現わすと諭されています。

信仰者としての在り方を正すとともに、自らが道を求めて通る姿を、後に続く人たちにしっかりと映していくよう

に。お道らしい空気の中で、子弟やよふぼくの育成の上に、しっかりと心をつくしてほしいとの思召です。

▼かんろだいの節を通して

今年はこの人材育成の旬の最中に、かんろだいの事情という大きな節をお与えいただきました。

内統領は、ちばにお鎮まりになる親神様、存命の教祖に、ただただ申し訳ないと、お詫びの心で次の様に話されました。

月次祭当日・ごどもおちばがえりの初日に、その大節を見せられたこと、おちばにつとめる者の一人として、深く反省する。親神様・教祖・ちばは、その理一つであること、ちばに据えられたかんろだいは私たちの信仰の中心・芯であり、その芯に節を見せられたこと、改めて私たちの信仰態度——親神様の思召に、本当に、日々、添い切つたつとめ方が出来ているのかどうか——を、強く、反省を求められたものと悟る。

ちば一条・神一条の精神を再確認することが必要だとの仰せです。

神一条というのは、自分の考えに合わせて親神様の教えを解釈するという

信仰姿勢ではなく、教えに自分の考えを合わせていくこと。改めて、このことをしっかりと胸に治めたい。

2段になったかんろだいの姿を見たときに、明治14年、2段まで造られたかんろだいの石普請が頓挫し、翌年に没収された、一つの大きな節事がひながたの中に示されていますが、その中、先人たちが必死に通られた、その真実があつての今日の姿です。

その事を思案すると、現在、当り前にかんろだいを押し、おつとめをつとめる自分に、心の緩みがなかったかどうか、反省の色を強くするところです。

内統領は、さらに、教会本部の内々の者から、しっかりと心を治め直して、真摯に親神様の思召を温ねて御心に添い切る心でつとめると誓われました。

同時に、教内のよふぼく・信者の方々にも、このおちばに見せられる節を我が事と捉え、実のをやである親神様・教祖にご安心いただけるよう、それぞれ、心を磨いて生き節になるように、共々に、しっかりとめたいと説かれました。

このかんろだいの事情も、8月24日、据え替えの儀がつとめられ、また、元の通りにひながたかんろだいがちばに

据えられました。元の姿に戻ったことで、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ような気の緩みを許すことなく、親神様・教祖にお喜びいただき、真柱様にご安心いただけるよう、旬の御用を、しっかりとめ果たしたい。

▼神に凭れて陽気におつとめを

教祖が、50年に亘ってひながたに示されたのは、たすけ一条の道であり、その手立てとしてのおつとめを教えられています。おつとめをつとめる上で大切な私たちの心構えは、親神様にしっかりと凭れ切ることです。

おふでさきにも、

しんぢつに心いさんでしやんして
神にもたれてよふきつとめを 四 49

これからハ心しいかりいれかへて
神にもたれてよふきつとめを 十三 10

これから八月日ゆう事なにも事も
そむかんよふに神にもたれよ 十三 68

したるなら神のほふにもしんちつに
たしかひきうけはたらきをする 十三 69

と教えられます。

おつとめによつてご守護を頂戴するのですが、そのおつとめをつとめる私たちの心は、人間思案を一切捨てて、一条心で親神様にお凭れすることで

す。

かひろだいに見せられた事情を思案するとき、かひろだいは、かぐらぶとめをつとめる芯ですが、これを我が事として、それぞれが考えたときに、それぞれに、教会に結ばれてつとめる、それぞれのつとめのつとめ方、自らの心向きは、いかがでしょうか。この点もしっかり思案しながら、改めて、心を正して通りたい。

▼実の神を誠にするとは

親神様に凭れて通るということで、御伝に示される飯降伊藏様の道すがらを振り返ってみますと、奥様のおさと様のお産の煩いをたすけられた。そのとき、教祖は、必死にお継りする伊藏様に対して、「救けてやる。救けてやるけれども、天理王命と言う神は、初めてのことなれば、誠にする事むつかしかる。」・「神様は、救けてやる、と仰しやるにつき、案じてはいかん。」と仰せられ、案じ心を遣わずに、真つ正直に親神様にお凭れして通るように諭されています。

こかん様に3日と仕切ってお願ひしていたとき、散葉を頂戴して帰られた伊藏様は、妻のおさと様に事の由をお

話しになり、教祖から教えられた通り、腹帯を取り、散葉を、早速一服、夜一服明け方一服頂かれたところ、気分は良くなりました。

鮮やかなご守護に、伊藏様は夜が明けるのを待ち兼ねてお屋敷に帰り、御礼を申しあげられました。

さらに散葉を頂いてお戻りになり、おさと様に頂かせますが、夕方から大そう楽になり、その二日目の夜、伊藏様は三度お屋敷にお帰りになったと誌されています。

産後の煩いに苦しむ妻、救かりたい一念、藁をも掴む思いで、教祖にお継りされた伊藏様のお心は、目の当たりに見せられるおさと様のご守護の姿に御礼を申さずにはおれない、じつとしては居られない気分であられたのでしよう。

櫛本からお屋敷まで片道5kmほどもある道程を、救けられた嬉しさ・感激で、御礼を申さずにはおれない心いっぱい歩いてお屋敷へ帰られました。三日目には物に凭れて食事ができる迄に救けられた。

教祖を信じて疑わず、教祖の仰せのままに、素直に凭れ切って、真つ正直に通られた伊藏様の誠真実。そして、

救けられた喜びとそのご恩報じに、身をもってつくし切られた御こうのうは、後に本席としてつとめられることにもなりますが、道を通る者の在るべき姿を教えられています。

教祖は、ひながたの最初に貧のどん底に落ち切つていかれますが、教祖御自らが、たすけの姿を現実目の当たりに示されるようになるのは、このをびや許しが始まりです。

嘉永7年、教祖が57歳のときに、初産で帰られたおはる様に、初めてをびやの許しを渡されました。これ以前に、教祖御自らがをびやの試しをなさっています。人様ををびやの許しを初め出されたのはおはる様が始まりです。

おはる様には、お腹に息を三度かけられ、お腹を三度撫でられて、その翌日、大変な大地震の中、長男の亀蔵様を安産されます。

その後、をびや許しを願ひ出られた方は、教祖に「人間思案は一切要らぬ。親神様に凭れ安心して産ませて頂くよ」と諭されましたが、そのお言葉

を十分に信じ切れず、お凭れすることができず、昔からのお産の習慣に従って、産後の熱で1ヶ月ほど床に臥せつ

てしまわれました。教祖に何うと、疑いの心があつたからや。」と仰いました。

再び妊娠したときは、今度は決して疑いませんと固く誓つて、再び、をびや許しを頂かれ、ただ一条に親神様にお凭れして、安産のご守護を頂戴されました。

本席様のお話しの中に「初めての事なれば、誠にする事むつかしかる」とあるように、しっかりと親神様に凭れ、十全のご守護に縋って通るところに、鮮やかなご守護を頂戴できることを教えられますが、私たちの信仰は、信じられ切つて通ること、信じて行なうからこそその信仰の道です。

▼入信の元一日―ご恩報じの道

お道に引き寄せられた元一日、初代の道を思案すると、皆、無い命をたすけられたとか、成らん事情を治めていただいた日があります。

教典第六章「てびき」に

なにとてもやまいいたみはさらになし
 神のせきこみてびきなるそや 二七
 せかいぢうとこがあしきやいたみしよ
 神のみちをせてびきしらすに 二二
 即ち、いかなる病氣も、不時災

難も、事情のもつれも、皆、銘々の反省を促される篤い親心のあらわれであり、真の陽気ぐらしへ導かれる慈愛のてびきに外ならぬ。

と示されています。

身上や事情にしろしを見せられて、どうにもならない悩みや苦しみの中から、たすかりたい、たすけていただきたい一心で、この御教えに縋り付き、おたすけを願って、今日があるお互いです。

親神様は、人間の陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召されて私たち人間を創られたことを、初めて教えられ、元なるをやであること、創られたばかりでなく、この世・身の内全てを守護くださる実のをやであることを教えられました。

この体は親神様からのかりもので、心一つが我が物であるという親神様のお話しを諄々と聞いて、これまでの心遣いを諭され導かれて、思召に添う心を定めて、たすけられました。

成らぬ中をたすけられた、何ものにも替えがたいその喜びの心が元となつて、どうでも教祖にお喜びいただきたいと、ご恩報じの心を定め、人だすけの道を歩む心定めが出来て、これが信

仰の第一歩になりました。

こうしたことは、具体的には、御伝の御逸話の中にいろいろと示されています。

たすけられた喜びに、ご恩報じの道として、たすけてほしいと願う人をたすけに行くことが、一番のご恩返しと、教祖は教えられています。

また、「命のないとこ救けてもろうて、結構やつたな。自分が救かって結構やつたら、人さん救けさしてもらいや。」(逸155)と仰せになり、「どうしたら、人さんが救かりますか。」(逸100)とのお尋ねには、「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」(逸100)と仰せられて、分かります、人だすけの方法まで教えられ、すっかり人だすけに励むように促されています。

▼大恩に報じる道

おさしづに

大恩忘れて小恩送るような事ではならんで。これ、一つの心に第一治めてくれにやならんで。

(明治34・2・4)

とあります。道の初代、私たちの先人たちは、こ

の大恩を忘れることなく、教祖のひながた一条に、ご恩報じの道を真っ正直に通られたおかげで、今日の道の姿があります。

今日、信仰する者の多くは代を重ね、また、信仰初代の人でも、年限が経つにつれて、そのときの感激がどうしても薄れてしまうので、「身上や事情をたすけられて良かった」というだけでなく、「日々の親神様のご守護、これを喜び感謝して通れる人にまで成人する、丹誠する」ことが大切です。

前者が「小恩」、後者が「大恩」に報じることです。

おふでさきに、

にんけんハみなく神のかしものや
なんとをもふてつこにいるやら 三 41

にんけんハみなく神のかしものや
神のちうよふこれをしらんか 三 126

めへくのみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん 三 137

と教えられます。身上だけではなく、親神様の創られたものは、すべて親神様からお貸しいただいているものです。夫婦抱き合わせの親神様の懐であるこの世界、親神様の十全のご守護のままに生かされているお互いです。

私たちの体は親神様からのかりものであるということが分からないようでは、何も分かるはずはない。換言すれば、かしまの・かりもの理が真に心に治まると、すべてが分かってくると思えられます。

病んでみて初めて、常日ごろの身上の健やかにお連れ通りいただいている親神様の十全のご守護のありがたさに気付きますが、当り前に思っているのご守護こそが「大恩」であると。ご守護いただいた、たすけられたと言つても、今、現在、当り前と思つている、これ以上のご守護はありません。

この、常日ごろ、結構にお連れ通りいただいている姿こそ、一番、大切な親神様のご守護であり、この「大恩」に報いる道をしっかりと心定めて通ることが大切です。

たすけられてうれしいと思うなら、その喜びで人さんをたすけに行きなさいと教えられることが一番のご恩報じと仰ることを、改めて、しっかりと心に治めて、それに報いる道を通りたい。

▼よふぼくの使命

教典第九章「よふぼく」に、たすけて頂いた喜びは、自ら外

に向つて、人だすけの行為となり、ここに、人は、親神の望まれる陽気ぐらしへの普請の用材となる。これをよふぼくと仰せられる。

(中略)

たなくとよふぼくにてハこのよふをはしめたをやがみな入こむで 十五 60

このよふをはじめたをやか入こめば

どんな事をばするやしれんで 十五 61

(中略)よふぼくの使命は、たすけ一条にある。それは、自らはげんで、天の理をよく心に治め、身をもつて教の実を示しつつ、一言

の話を取り次ぐにをいがけに始まる。(中略)なんでもたすかつて貰いたいとの一念から、真心こめてさづけを取り次がせて頂くところに、珍しいたすけの実が現れる。

と述べられています。よふぼくとして与えられるお互いの立場を、もう一度しっかり思索し、先ずは、よふぼくとして、おさづけを頂戴したときの心を、元一日にたすけられたときの喜びや、ご恩報じの心で、今も違わざるように持つて、変わることなく、しっかりと、この道を通りたい。

▼ひのきしんは大恩に報じる発露

真柱様は、昨年の秋季大祭において、ご恩報じの道として、ひのきしんという言葉で次のように諭されました。

「おさしづに、

めんくかりもの承知。かりもの分かつても、かりもの理自由分からねば何もならん。

(明治20・10・12)

と仰せになつて、単に体が親神様からのかりものだと承知しているだけではなく、身の内に頂く自由のご守護が分からなければなんにもならないと仰せくださるのであります。

(中略)私たち人間の体には、世界にあまねく行き渡る親神様の十全のご守護が凝縮されているといつてもよいであります。その日々、身の内に頂戴している絶大かつ精妙なご守護のおかげで、私たちは体を思うように使うことができるのであります。

お道の教えを聞かせてもらっているお互いであれば、日ごろ頂いている親神様のご守護のありがたさは、よく承知しているのでありますから、健康な毎日をあげたい、うれしいという心で通ることができると思うのであります。

すなわち、ひのきしんは、身上をお

たすけいただいたことへのご恩報じであるだけでなく、むしろ、常々頂戴している限りないご守護によって生きていくことに対する、日々の感謝報恩の行いと申せるでしょう。ひのきしんは日常の絶えざる喜びの発露なのであります。

(中略)

また、みかぐらうたに、

よくをわすれてひのきしん

これがだいゝちこえとなる

(十一下り目4)

と仰せくださいます。よくをわすれてとは、言い換えれば見返りを求めないということでしょう。ひたすら感謝の心からするひのきしんが肥となるということだと思ふのであります。また、

このお歌は、ひのきしんに勤しむうちに欲を忘れてしまうという意味でもあると思ふのであります。いずれにしても、常日ごろから心がけていくことが大切だと思ふのであります。」

▼ご恩報じとしてのつくし・はこび

ご恩報じの道として、一つには、人をたすけること、また、ひのきしんすることですが、つくし・はこびも、一つのご恩報じの道です。

おさしづに、

尽した理は将来の理に治まる。どんな大きいものでも、たゞ心だけではどうもならん。道のため尽し果たした理は、難儀不自由という理は無い。

(明治31・10・31)

危ない事、微かな理で救かるは日々の理という。(明治26・4・29)

と仰います。

日々の親神様のご守護に対する感謝の気持ち、日参を始めとする日々の理、真実のつくし・はこびは、まさかのとき、親神様が本当に大きく受け取られ、働かれる理に結び込まれる、親神様への真実のはこびです。

別席のお話しの中に、こういう下りがあります。

「この道は、若きも年寄も男女の隔てはありません。つくした理は立つのであります。つくす理はこぶ理によつて、いんねんの理も切つてくださるのでありますから、これから先は教祖のお通りくださった50年の間の道筋、道すがら、いかな理も良く聞き分けてその足跡を踏んで通り、教えを聞いては日々、変わらぬように心を定め、理を守り道のため、誠の心を奮い起こして、ごうのうを積み重ね、人の為に苦

しみは後の楽しみ、ずつなきことあれば節と思うがよろしい。節から良き芽が吹き、楽しみの道見えてくるのであります。苦しみは我が災難を逃れる台でありますから、人の難儀は救けてあげたい、不自由は救うてあげたいと思う誠は親神様のお心に適うのであります。天の理であります。また、人をたすけるといっても、誠無ければたすけられん。その心の理が、人をたすけ我が身もたすかる。人をたすけるには、られませんか。」

しつかりと、親神様に、誠真実をつくしはこびたい。

▼いんねんの自覚

教会長子弟の育成ということについて、立教50年の教義講習会第3次のときに、真柱様は次の様に仰いました。

「ここに、ひとつ考えなければならぬことは、それは、若者の丹誠を如何にするかということでありませぬ。殊に教会長の子としてこの世に生まれ育つ若者に対し、たすけ一条の使命の自覚に目覚めてもらうにはどうすればよいかと、その根本を真剣に考えさせていただいで、取り掛からねばなら

ないのは、今日の急務であると、私は考えているのであります。

根本から思案すると、私たちは、誰でも、いんねんあつて、いんねんのあるところへ生まれ出ているのである。それぞれの両親は、自分で選ぶことはできないし、両親も、また、自分の子を選ぶことはできません。どの人をもどる家を与えるかは親神様のなさるお仕事なのであります。親神様がお取り計らいになつて結ばれた縁なのであります。親神様が、銘々の魂のいんねんを見定められて、そのいんねんに相応しい家庭へと生まれさせられるのであります。私は、そう考えさせてもらいます。

例えば、教会長(の許)に生まれた子どもは、全部、その教会長に生まれるいんねんの魂の者ばかりである。

親神様は、陽気ぐらしへのたすけ一条の御用に役立てようと生まれさせられた者である。だから、血を分けた親子でありましても、親神様からよぶべくに育てよ、道を通る者に育てよとお預かりした子どもであると考えさせていただく以上、私は、子どもの一人ひとり、最初からそのつもりで、親はもちろんのこと、子どもに関わる周囲の人々も協力して、いがみ・かがみ

のよふぼくにならぬように育てて掛からねば、親神様に申し訳が立たぬことになるのではないか。

また、子どもには、たすけ一条の御用に役立てるよう教え、常に自分の考え方や態度が、道の者に相応しくあるように、付いて教えなければなりません。

若者にも、また、自分は、いんねんあつて教会長の子どもとして生まれ、そうして育つたという自覚を持つてもらわねば困るのであります。

そこから、すべての仕付けや思考が始まるものと私は考えさせてもらいたい。

そして、そのためには、何としても、教会長である皆さん方が、自分にお任せいただいている任務に、強い強い自信を持つていただきたいということでありませぬ。

なるほど、教会長の仕事は、考え方によれば、実に煩雑で煩わしくもあるだろう。けれども、四方八方に枝を伸ばし、根を張らせることは意のままであり、その繁栄は、それぞれの心次第であるという仕事は、私は、世界広しと言えども、余り、類がないのではな

そう考えるという、実に誇り高い仕事であると思いませんか。働き甲斐のある御用であると思つていただきたいのであります。」

教会で生まれ育つた者は皆、親神様の御用を積極的につとめようと思うように育つてもらえるよう丹誠しようと促されています。

以上、人材育成の上に、また、かんざいの事情の上から心引き締めて、一つ、それぞれ通らせていただきたいと思ひます。

《以上要約》

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていますので転載いたします。(敬称略)

▼『天理時報』

▽10月29日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡◎ 池田広子さん

今日からは入浴、シャンプー許されて

夫はいそいそ風呂場へ向かう

※同日付の「座右の一字」には、海

松ヶ岡◎藤井光子さんが掲載されて

ています。

▼表紙写真

(吉岡輝昭かさおか編集部員)

「有志
ひのきしん隊」実施

青年会

青年会笠岡分会(上原明勇委員長)は、10月18日、海松ヶ岡分教会で有志ひのきしん隊を実施した。

今回は、教会の裏側にある斜面の草刈りと竹の伐採を7人で行った。



海松ヶ岡分教会にて
草刈りひのきしん

よふぼく勉強会開催
テーマは「心の痛みのおたすけ」

10月月次祭後

育成掛

育成掛(中島誠治主任)は10月21日、祭典終了後、会議室で「心の痛みのお

たすけ」をテーマに「よふぼく勉強会」を開催、約20人が参加した。講師の香取満彦氏(川島郷分教会後継者)は、事情発達センター・母子生活支援センターに勤務の経験から、主に発達障害について話された。趣旨は次の通り。

幼稚園児・保育園児の発達障害には一緒に遊ぶ、共に勉強する姿勢が大事、いつも子ども達はどういうふうにするか分かってくれるかと心がけて、それを周りの方に伝えるのが私の仕事。子ども達は耳で聞いた情報がイメージ出来ない。音として聞こえるがまるで外国語を聞いていてるようにならない。分かってほしいことを視覚で教える。例えば給食のスプーンを持ち方の手本を見せて覚えて貰う等、子供達と遊ぶ中で効果のあったことを相談者に伝えている。

また高齢の方の仕事を終えてからの燃え尽き症候群、思春期の方が自分の在り方で悩んでの自傷行為。大人にも若い方にも発達障害という心の悩みを持つていてる。こういう方が日常生活の中でどういうことに気をつけたら良いか。大切な3点がある。

一つには「相手のことを分かる」とこ



側に寄り添う心の在り方が必要

もが家を出てしまう時、子どもは長期のストレスにさらされ、その結果、判断力が落ちてしまう。考える力が弱まり、記憶力が弱くなり本来の自分の在り方より劣ってしまう結果となる。その対処としては、今、出来ること以上に重いことをさせないが必要。あいまいに「頑張れ」というのではなく、その方が今、苦しんでいること、相手の心を理解する事が大事。

二つ目は「余計なことはしない」とこ
と——例えば配偶者の死、失業等を機に鬱病うつ病のきっかけになるということがあるが、今までの努力の心の積み重ねが大きい。鬱病になる方はむしろ頑張

り屋さんで、子どもの時から良い子で成績も良く、大人になっても頑張つて家族を養って来た人が発病したとき「頑張れ」と言われると、これ以上どう頑張つたらいいのかと、生きる気力がなくなってしまう。今、その人がどれだけしんどいかを分かって、今できることをしようと伝える。単に「頑張れ」は無用。努力を求め、努力が足りないというのは「頑張れ」というのではなく、「こうやってみようよ」と考えることが重要。

三つ目は「支えてあげる」こと——
気力が衰えて、風呂に入れない、食事が取れない。そんな時に日常生活を支えてあげる。話を聞いてあげることが大事。

話し相手になるときも、相手の話の腰を折らずに聞いてあげることが重要。また医療関係、専門機関に頼ることも大事。

また、完全に元の状態に戻すことは難しいこと。何とか暮らしてゆける。そういうように思うこと。その人が幸せな気持ちになつて暮らせるように頑張るのではなく、気が楽になつてゆっくり歩んでゆくのが大事。側に寄り添う心の在り方が必要。

天理教には「陽気ぐらし」という素晴らしい生き方がある。「陽気ぐらし」は世界中の人間が、互いに助け合って、喜びにあふれて共に暮らしていくという世界。

難しい言葉でなく、分かりやすい表現で幸福になれると伝えていくことも大切。

青年会総会 開催

10・27 本部中庭

青年会

青年会本部は10月27日、第93回「天理教青年会総会」を本部中庭で開催。国内外から青年会員ら約1万1千人が参集し、笠岡分会からも全ブロックの会員が参加した。

青年会長である中山大亮様は告辞の中で、来年迎える創立100周年に向けた活動について説明したうえで、あらゆるりようとしての心構えを示すとともに、陽気ぐらし世界の実現に向けて、青年会員全員が必死になつておたすけに励もうと呼びかけられた。さらに、来年の総会を「創立100周年記念総会」と銘打ち、10月28日(日)に開催する旨



笠岡分会青年会員

を発表された。

この後、真柱様がお言葉に立たれ、「自分の足元を固め、しっかりとした信仰の考え方を身につけることに心を配ってほしい」と求められた。

こかん様に続く会開催

本年より年2回開催

女子青年

11月4・5の両日、笠岡女子青年(武内ゆり委員長)は、こかん様に続く会を開催させて頂きました。

今年から笠岡・天理の2ヶ所でさせていたいただくことになり、今回は天理で



笑顔いっぱいの食事

の開催です。1日目は、十三峠を超える予定でしたが、天候が悪かったため、途中までで断念しました。ですが、全員で無事に天理に帰らせていただくことができました。詰所では奥様方が作ってくださったお鍋・デザートプレートをいただきました。

2日目、支部長様より陽気ぐらしをするための日々の心遣いについてお話を聞かせて頂きました。お話の後、詰所の講堂にて室内オリンピックをさせて頂き、昼食はバイキングに行かせていただきました。

今回、2日間合わせて合計33名の女子青年さんが参加をして下さいまし



笠岡につながる女子青年一同

た。沢山の方に参加していただき委員一同とても感謝しています。参加してくださった女子青年の皆さん、サポートしてくださった婦人会の奥様方、青年会の方、本当にありがとうございます。(委員長 武内 ゆり)

広島平和公園での
外国語パンフレット
 にをいがけ
海外部

世界の平和を祈って

新山邑分教会 三島 美保子
 11月8日、広島平和公園にて海外の方々へのをいがけをさせて頂きました。

大教会を出発したときには降っていた雨が、到着する頃にはあがり、まず初めに平和公園内で世界平和を祈っておちばに向かい、よろづよ八首のてを



世界平和を願って

どりをさせて頂きました。それまで気ままに遊んでいた元安川のカモ達私たちがよろづよ八首に合わせ、隊列を組み替え乍らこちらに向かつて泳いでくれるという微笑ましい光景を目にし、ほっこりした気持ちにをいがけを始めさせて頂くことが出来ました。

参加者7人が2グループに分かれて約1時間、フィリピン・ベルギー・イギリス・オランダ・オーストラリア・フランス・シンガポール・アイルランド・ドイツ・インド・ウガンダの21グループに外国語パンフレットをお渡しすることが出来ました。

平和公園を訪れているほとんどの方が2日から10日ほどの滞在予定で九州・京都・金沢など他に目的地はあるけれど、広島を見てから、という方が多いように感じました。やはり世界平和に関心が高い方が多



オランダからのご夫婦に

く、「私たちは世界平和を祈っています」と伝えると、それぞれの笑顔がさらに輝き、快くパンフレットを受け取ってくださり、早速目を通してくださる方もいました。

今回初めて海外の方へのをいがけに参加させてもらい、ハローと言うのが精一杯で、事前に教わった簡単な声掛けの言葉さえ話せなかったですが、世界の平和を祈っている人たちに直接触れることができ、ニュースを見ていただけでは知ることのない感触を体感しました。

相手の心の中に何かを残し、縁がなくなっていく様、ちゃんと思いを伝えたいと強く感じた経験をさせて頂きました。1日でした。

にをいがけ号
タンザニアに上陸
海外部

トヨタレジアス(芳井分教会から寄贈)に、せっかく寄付するならと、TENRIKYO CHURCH や KASAOKA CHURCH の文字と、見た人たちが陽気になるような絵を書き込み寄付しようと、着飾った姿を9月の大教会月次祭でお披露目しました。

車は船便で40日ほどかかって、10月



タンザニアのプレートナンバーがきました

タンザニア 訪問記②



大教会役員夫人
上原 千枝子

2010年タンザニア訪問2回目の帰国の便には主人と芳井の佐藤和代さん、そして前年の訪問から主人の心に

21日にタンザニアの港に到着しました。その後、現地のよふぼくであるマコタ氏が整備とナンバープレート取得などの手続きを済ませて、今日19日、バガモヨにあるアマニ孤児院を訪問しました。



タンザニアから
カリブレジアス

掛かっていたステイーヴ(当時20歳)が乗っていた。彼は幼い頃、両親と死別し、マユンガさんに養育してもらっていた。彼も又天理教の勉強を

してタンザニアの支援のために力を尽くしてほしいとマユンガさんの後押しを受け、ビザの申請に足を運んだが4月の修養科英語クラスへの入学に間に合わず、時期を遅れての入国となった。許された期間は1ヶ月半であったため、大教会でのひのきしん生活を通してよふぼくとなった。彼は英語の伝わらない現地の人にスワヒリ語で私たちの思いを伝えてくれる大切な繋ぎ役となってくれている。

「Shiroはいつタンザニアに来るのか？」

あちらでは旦那さんの身の回りの世話をする奥さんのことを旦那さんの名前の前に「ママ」をつけて「ママ」と呼ぶのだ。と説明を受けて早13年。

日本に来てくれた彼らには「ママ Shiro」と呼ばれ続けているが私の名前「千枝子」と呼ぶ人が誰もいない



よふぼくになって初めてのおつとめ



。(たぶん知っている人がいないと思う！)

ここ数年、訪問から戻った主人が伝えてくれる(お世辞も含めてかもしれないが)、「いつママShiroは来るのか」と質問される言葉に心がすぐられる。いつか私に訪れてもいい日が来るのだろうか？ 自分が行かせてもらうことはないだろうと思っていたけれど、昨年6月に修養科を修了して念願の用木となり帰国していったエディナ



運転手をつとめてくれたチュビさん

が神実様を家に祀らせてもらおうと言葉があったことを機に、今回の訪問のメンバーに加えて貰う事となった。17年ぶりの海外に少々戸惑うことはあるけれど、おやさまのお伴をさせて頂いてもかく無事に神実様を祀らせていただき、タンザニアの地におぢばを慕いおつとめをつとめる場所ができることだけを心におき、22時間のフライトの末、主人、佐藤和代さん、上原孝君と共に初めてタンザニアに足を踏み降ろすことができた。機内から見るダルエスサラームの街は野生の動物がそこら中にいる大自然のイメージとは全く違い、トタン屋根がぎっしりと並んでいて想像以上に人の多いことが伝わる景色だった。

空港にはステイヴ、他3名が出迎えてくれた。ステイヴとは7年ぶりの再会だった。身長もお腹周りも大きくなりちよつと大人になったように感じる。

荷物と人でギュウギュウ詰めの中はダルエスサラームの街をぬけてミリタリーの病院へと向かった。門では迷彩服で拳銃をもった軍人さんが入場の理由を聞いてきた。2年前用木になったマコタの父が糖尿病が原因で両足を切断することになったから彼の無事を祈ってくれと出発前から言われていた。荷物をほどこことなく直行し、術後の彼の身体にみんなでおさづけを取り次がせてもらった。ミリタリーの病院といつても簡素で日本の病院の雰囲気慣れている私にとっては本当に大丈夫? と聞きたくなるような感じがした。タンザニアに糖尿病? と何か不思議だったが水を手に入れるより清涼飲料のほうが安易に手に入ることを思うとなるほどと合点がいく。ただ、日本のような治療法や医療技術はないので壊死した所を切るという処置しかないらしい。ともかく今回の目的であった車いすの寄贈と他の病人さんへのおさづけもさせてもらい病院を後にした。(続く)



病院にて

秋季大祭祭文

これの笹岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ

親神天理王命の御前に 会長上原理 慎んで申し上げます

親神様には「人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたい」との思召から道具を寄せ 守護を教え 天然自然を整えつつ八千八度の生まれ変わりを経て人間へと育て下さいました 人間は自然環境の変化に伴い世界中へと拡がり それぞれに社会を作り生活するようになりましたが 一列兄弟である事を忘れ心得違ひの上から次第に争うようになり 陽気ぐらしの世からかけ離れてしまいました それを哀れと思召され旬刻限の到来を待つて天保九年この世の表にお現れになり 教祖を月日の社と定め 世界たすけの道をお付け下さいました 以来身上事情を通して人々をお寄せになり 陽気ぐらし建設の用木にお育て下さり世界たすけのご用にお使い下さり陽気ぐらしへとお導き下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は御恩報じを念じつつ日々は朝夕に御礼申し上げると共に たすけ一条のご用の上に努め励まして頂いております

その中でも今月二十六日は立教の元一日の尊い日に当たり おぢばでは秋の大祭が執り行われますので 当大教会でも理のお許しを戴いて今日の吉日 只今からおつとめ奉仕人一同喜び心も一人に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりを勤めて秋の大祭を執り行わせて頂きます 又御前には今日の日を樂しみに寄り集い共にお歌を唱和し 日頃のご高恩に改めてお礼申し上げ尚も変わらぬ親心にお継りする 皆の真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は世話人島村廣義先生の御参拝を頂いておりますので 後ほど御講話をお聞かせ頂きます 時句に当たつてのおぢばの声と受け止めさせて頂き 皆一手一つに心を合わせて親に喜んで頂けるよう 成人の歩み進めていく所存でございます 又本部の秋の大祭や十一月二十五・六日の別席ひのきしん団 参に一人でも多くの人を誘い合わせておぢば帰りさせて頂き 教祖に「よう帰つて来たなあ」とお喜び 頂けるよう努めさせて頂く所存でございます 更には又現在開催中の後継者講習会や十一月二十三日開催の若人の集いへの参加声掛けをさせて頂く等丹精をさせて頂き 加えて婦人会笹岡支部では二年後の会長様ご臨席総会に向けての巡回を通して 道の後継者育成にも力を入れていく所存でございます

何卒親神様には 育成の時句に当たりお助け人を育てるといふ明確な目標を持たず一条に励む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に尚も自由のご守護を賜り 親神様の御守護の世界を知り一列兄弟の理に目覚めて助け合う人が増殖して お望み下さいます陽気ぐらしの世の状に 一日も早く立て変わりますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十年 秋季大祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	役割			講話	祭主		
									おつとめ	てをどり	地方		区分	扨者	門勝元教
今川佐智子	上原順子	虫明好美	中村義太郎	森本忠平	中村道徳	中村邦義	笹尾正治	今川昌彦	門勝郁子	大教会奥様	上原繁道	上原明勇	大教会長様	田中隆之	門勝元教
中村初美	岡崎豊子	佐藤香苗	上原志郎	田林久嗣	山田敏教	三島渉	赤木素志	佐藤真孝	高木孝子	門脇加津	内海安子	上原浩	前	指図方	賛者
笹尾一美	室悦子	谷内美知子	森本忠善	岡田誠	浅野明教	虫明立生	武内清明	内海史郎	吉岡八恵	横山小智榮	武内正美	山野弘実	後	上原明勇	山野弘実
													十二月講話	上原浩	上原浩
													吉岡 壽		

大教会だより

◎三日講習会全課程修了

立教180年11月9日修了

照陽 劔持 智子
照陽 劔持 秀子

訃報

福田 勝氏

服部分教会会長

11月1日出直されました。
享年 72才

開地綾子姉

神昭分教会前会長夫人

11月13日出直されました。
享年 93才

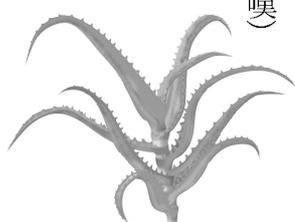


私はしばしば自室の模様替えをする。それこそ思い立ったらすぐ始める。片付けているけどなかなか良いよう

にならない。物を捨てられないからどうしても手狭になってしまふ。家内は何でも捨てる。私の大事な昔の写真もアルバムも捨てようとするので「頼むから置いといてくれ」と言う。……頼むからといわなければ捨てられてしまふ。男は昔を引きずり、女は今を生きるのかな。男は夢を見るけど、女は現実派だな。公園に行く。男はベンチでポツンと一人……、女は二人か三人でしゃべって大口に笑っている。しかも必ず何か食べている。これはけっして私と家内のことをいっているのではない。やっと部屋が整理できた。でも日が経てばまた変えたくなる。「男は新しい物を欲しがらる者でございます。」鶴田浩二も私もそうなんです。テレビは言う。思い切って捨てましょう。ほつといてくれ。私はためる。いつかゴミ屋敷。

頑張って作成した「かさおか」の紙面が最後に馬鹿を書いてしまった。ああ(嘆)

(ひ)



昭和56年 (1981年) 立教144年

- 11・21 大教会役員任命
- おつとめ奉仕人 宮本おふさ
- 11・22 大教会理事岡本久則出直(六十七歳)
- 11・26 瑞北分教会設立(初代会長福島泰道任命)
- 鎮座祭：十二月五日
- 奉告祭：十二月六日
- 設立場所：島根県八東郡美保関大字北浦一千百十一番地三
- 11・26 上父分教会四代会長岡明任命(三代会長瀬尾謙造辞任)
- 就任奉告祭：昭和五十七年一月十七日
- 11・26 芦加茂分教会設立(初代会長小川安子任命)
- 鎮座祭：十二月四日
- 奉告祭：十二月五日
- 設立場所：広島県福山市加茂町大字下賀茂五百九番地の二
- この年、教祖百年祭に向かう心の指針論達第三号が發布され、その趣旨徹底に向けて、本部巡教、また大教会部内巡教が行われた。十一月十一日に、中山正信眞柱名代の御入込のもと、大教会創立九十周年記念祭が執り行われた。また七月二十五日には本部西礼拝場の使い初めのおつとめがとめられた。また十二月一日には、おやさとやかた西右第五棟が竣工した。
- この年の大教会年間統計 初席者四百六十三人 おさげの理拝戴者三百三十三人 修養科修了者百九十三人 教人登録者五十九人 教人総数一千九百五十五人 よふぼく総数九千五百十二人。全教よふぼく総数

昭和57年 (1982年) 立教145年

- 2・11 大教会史編纂常任委員会(この年、十八回開催)
 - 2・26 福中分教会三代会長串田幸恵任命(二代会長串田クミヲ 昭和五十七年一月三日出直)
 - 就任奉告祭 三月十一日
 - 3・6 永尾一夫、橋本恵美子両先生を迎え少年会育成講習会(八四人)
 - 3・21 合祀祭(百四十柱合祀)
 - 3・21 教祖百年祭布教推進隊研修会(五七人)
 - 3・26 芦常分教会移転建築
 - 旧所在地：広島県芦品郡新市町大字常九百七十九番地
 - 新所在地：広島県芦品郡新市町大字金丸五百十二番地の六
 - 遷座祭：四月十日
 - 鎮座祭：十二月三日
 - 奉告祭：十二月四日
 - 3・27 第二十八回春季英語講習会(六〇人 三〇日まで)
 - 4・1 少年会鼓舞講習会(三〇〇人 四日まで)
 - 4・4 立教百四十五年上半年布教実修会始まる(七月まで)
 - 5・22 土佐やすえ先生を迎え第十三回婦人会笠岡支部総会挙行(六〇〇人)
 - 6・5 高橋政行・高橋和子両先生を迎え少年会育成講習会(六九人)
- 百万一千五百九十五人。